

## 博士論文要旨及び論文審査の結果要旨

氏名 林淑蕙  
学位の種類 博士（文学）  
学位論文題目 A Study of Christina Rossetti: As a Victorian Poetess  
(邦題: クリスティナ・ロセッティ研究—ヴィクトリア朝女性詩人として)

### 1. 論文内容の特色と要旨

林淑蕙氏の学位請求論文"A Study of Christina Rossetti: As a Victorian Poetess"（「クリスティナ・ロセッティ研究—ヴィクトリア朝女性詩人として」、英文、全体で177ページ）は19世紀ヴィクトリア朝詩人ロセッティの初期から後期の作品集までロセッティの作品全体を研究対象にして、この詩人の二つの側面—つまり、フェアリー・テイルや童謡詩を書いた児童文学作家としての一面と、当時の女性が置かれていた社会状況の中で女性の自立といった問題を提起した女性詩人としての一面—に焦点を当てている。換言すれば、ロセッティの物語詩を『眠り姫』や『シンデレラ』などのフェアリー・テイルと比較しつつ、フェミニズム的視点で論じようとするものである。これによってロセッティが従来よく言われているような子供のための童謡詩や優れた宗教詩を書いた詩人という評価を修正し、当時の女性の自立といった社会的状況を強く意識した女性詩人であると主張しているところは評価できる。本論文は、序論(Introduction)でロセッティに関する先行研究の紹介から始まり、ロセッティの詩の創作年代にほぼ沿う形で5章に分けて論じられている。以下、各章の内容を概観した上で本論文全体の評価を述べることにしたい。

第1章 “Juvenilia Poems”—’Sweet Love Shall Never Die’（『少女時代の作品集』—「優しき愛は不滅」）

この作品集はロセッティ初期の詩を集めたもので、従来あまり研究されていない。林氏はこの作品集を「家族への愛」「宗教信仰」「前世代詩人の影響」「死についてのテーマ」の四側面から探り、特に若き詩人ロセッティ自身が影響を受けた前世代の詩人（ブレイクやキーツ、コルリッジなど）の詩との比較研究は興味深いものであり、また創作の動機、後の成熟期のテーマや表現方法への萌芽等をこの作品テキストを丁寧に読み込んで論じていて、本章はこの論文が評価される一因となっている。

第2章 “Sing Song”—Maternal Love and the Image of an Ideal Family（詩集『歌を歌おう』—母の愛と理想の家族像）

この詩集は子供のための童謡詩が主として収められているが、この論文では多くのマザーグースと同様に詩作品の韻律やリズムの軽快さ、言葉遊びに着目すると同時に、内容面では子供の心で自然（太陽、風、花など）への愛を歌う詩や、母と子の愛をテーマに理想の

家族を描く詩が多いと論じている。

第3章 “Goblin Market”—Joining Hands to Little Hands (物語詩『小鬼の市場』—小さき手に手をとって)

ロセッティの傑作『小鬼の市場』は呪文のような繰り返しのリズムと豊かなイメージ表現で知られるが、その内容については小鬼(goblin)と姉妹の幻想的な出会いとその呪術的世界からの「姉妹愛(sisterhood)」による救済を描いたものである。そのため従来この詩は敬虔なクリスチャンでもあった詩人と重ねられて、キリストの受難と救済を暗示する宗教的な意味合いが込められたものという解釈がよくなされるが、林氏はこの幻想的な物語詩を『シンデレラ』『白雪姫』などのフェアリー・テイルと比較し、フェミニスト批評の視点からフェアリー・テイルの女性たちは「敵対関係」にあるのに対し、この詩では「姉妹愛」が描かれていると論じている。

第4章 ‘Sleep’ in the Tales: “The Prince’s Progress” and “The Sleeping Beauty” (物語における「眠り」: 物語詩『王子の行進』と『眠り姫』)

ロセッティのもう一つの傑作『王子の行進』は「眠り姫」を救出に向かう王子の寄り道による王女(眠り姫)の死を歌っているが、フェアリー・テイルの『眠り姫』の場合は王子に救出されて(眠りから覚めて)王女は平和な家族を形成するのと比較して、女性作家ロセッティとJ・ジェイコブズやペローなどの男性作家によるフェアリー・テイルとの違いなどを指摘した上で、ヒロインの「眠り」(ヴィクトリア朝時代の受身的な女性像の暗示)の意味についてフェミニスト批評の視点で論じている。

第5章 “The Iniquity of the Fathers upon the Children”—From Femininity to Feminism (長編詩「父親の子供に対する不当行為」—女らしさからフェミニズムへ)

この後期の長編詩では、父権の強い社会であったヴィクトリア朝における父親不在の「私生児」として生まれて成長した女性とその母の苦悩に満ちた出会いと自立というテーマを、女性の社会的問題に関心を抱くようになったロセッティ自身の伝記などと対比しながら、若い女性が自立した大人の女性に変容する過程を描いた詩としてフェミニスト批評の視点で論じている。

## 2. 論文審査の要旨と今後の課題

以上のように、この論文はロセッティの初期から後期の詩作品を『シンデレラ』や『眠り姫』等の古典的フェアリー・テイルと比較してそれぞれ丁寧に論じながら、ロセッティを優れたファンタジ作品を描く児童文学作家あるいは宗教詩人としてだけでなく、ヴィクトリア朝時代の自我に目覚めた女性詩人としてフェミニズムの視点からも新たに評価している。また従来あまり注目されていなかった初期作品集に注目して、前世代詩人(特にブレイク)との影響関係を指摘し、後の成熟期の詩人の萌芽を探っているが、これは新しいロセッティ像を提示するものとして評価できる。台湾出身である林氏には、口述試験の際に指摘されたような幾つかの課題に注意されながら、中国文学や日本文学の素養を生かして、グローバルな比較文学(比較文化)的視点でもロセッティやエズラ・パウンドなどの詩人

を更に研究されて英文学への研究に貢献されることを期待したい。

### 3. 口述試験と審査結果

口述試験は平成26年1月28日午後に学外の専門審査委員(平林)を含む4名の審査委員により本論文の内容、英語表現などについて長時間の質疑応答がなされた。委員からは今後の課題として英語表現、先行研究やフェミニズム理論の利用の仕方にもう少し工夫が必要であろうという指摘もあったが、論文内容については前述したような評価を得た。林氏は既に本学博士後期課程在籍中に語学試験である博士候補者試験にも合格しており、本論文の内容についての評価から判断して、本論文が本学の学位規則第3条2項に定められた博士(文学)の学位に適格であると判定した。

平成26年2月7日

主査 教授 鈴木俊次

副査 教授 安藤 充

副査 教授 田中泰賢

副査 愛知淑徳大学文学部教授  
平林美都子